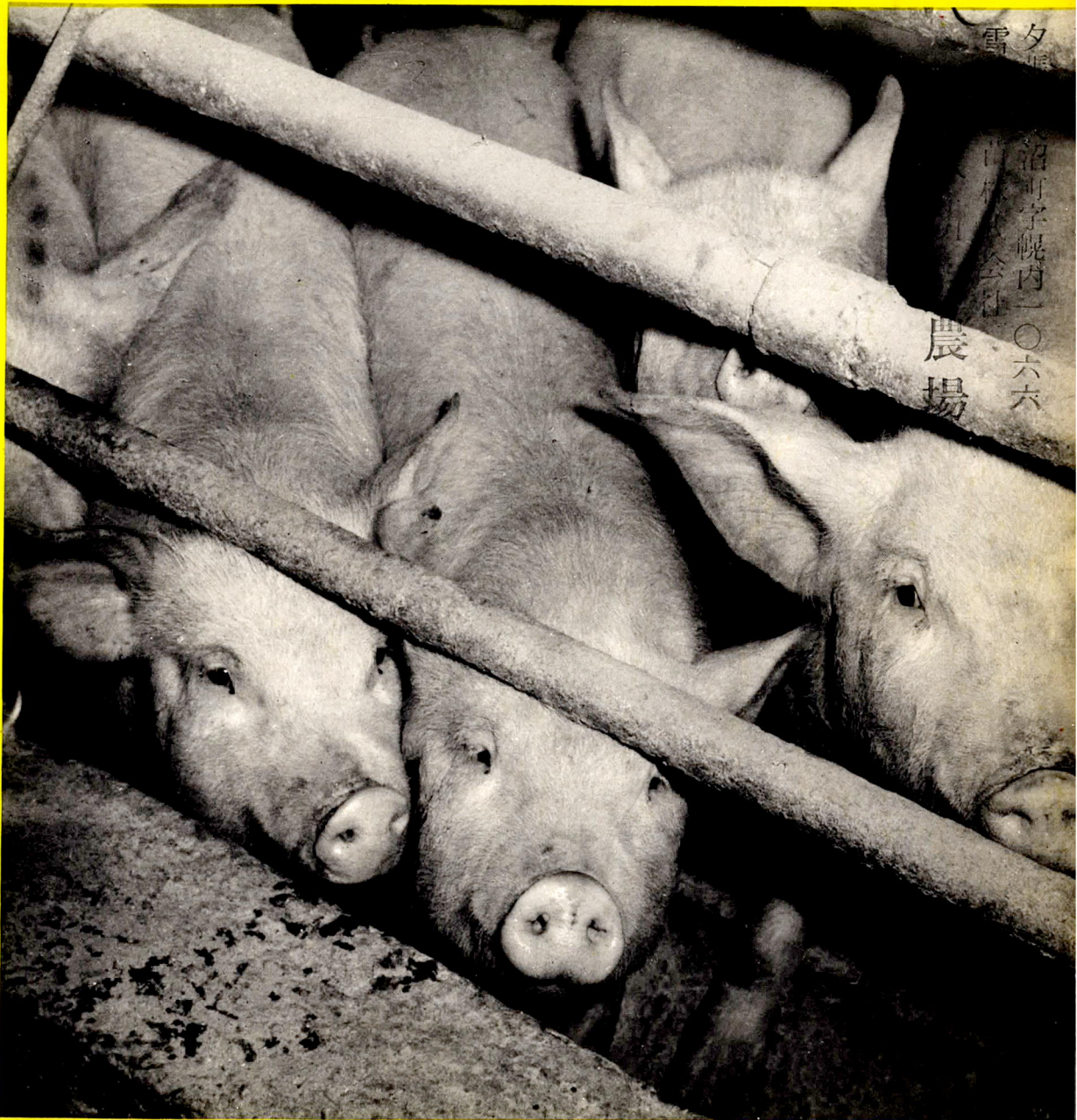


牧草と園藝



豚の病気のいろいろ VI

細菌

浮腫病

8～20週齢(主として8～12週齢)の豚で、1腹のもののうち比較的発育の良いものが突如後軀麻痺に陥り甚急性または急性の経過でたおれる。剖見所見では胃の大弯部の浮腫(肥厚)充血および腸の充血が特徴的である。致命率は高く80～90%である。

一方発生率は低く生産子豚の1%以下である。しかしきわめて発育のよい20kg前後のものが急に死亡するので、発生した種豚場の被害は大きい。臨床的には突然の後軀麻痺と眼瞼の浮腫でそれと知れる。本疾病の原因は不明の点も多いが、いろいろのストレスすなわち飼料の急変、高蛋白飼料、変敗飼料の給与または移動などの環境および気候の急変などによって特定大腸菌が胃や小腸で増殖し、そのうち毒素の体内吸収による即時型過敏症によるショック死と考えられている。したがって豚の異常に気付いてからの対策では手遅れである。

したがってこの時期の子豚の環境や飼料の急変をさけるといった子豚の生理にさからう管理をさけることが望ましい。また1腹の子豚中にこのような例がみられた場合、他の一見健康な同腹子豚に予防的に白痢の対策でのべた薬剤を投与するとともに副腎皮質ホルモン(プレドニン2mg/kg、バタメサゾン0.2mg/kg)を与えるとよい。

哺乳豚の白痢

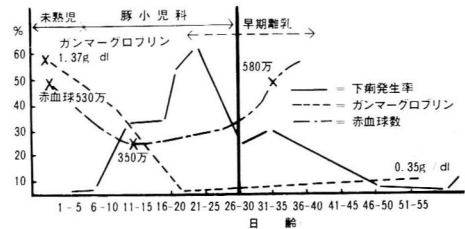
健康な母豚から正常に分娩され、2週齢ごろまでは順調に発育するにもかかわらず、14～25日齢にかけて最初は黄色の軟便にはじまりついで水様性となり発病48～72時間で白痢となる。この種の下痢が3日以上つづくとなら脱水による電解質異常がみられ、いわゆる高張性脱水症となりヒネ豚の原因となる。発生率はかなりたかく、40～70%にもおよびが致命率は低い。しかし子豚の育成に与える影響は大きく種豚家にとってはもっとも重要な疾病のひとつである。

本疾病の原因についてはいろいろ論議の多いところであるが、要は種々のストレスたとえば移行抗体の減少、生理貧血あるいは保温の不備などによって大腸に滞留し

ている特定大腸菌が胃や小腸で急激に増殖し、これが胃腸炎を起こすことなく菌体成分が血中に吸収されて起こる一種の体質異常(アレルギー)とみられる。その結果消化管に粘液が充満し臨床的には下痢となる。

まず適切な種豚の管理と分娩豚房の乾燥、消毒および子豚に対する十分な保温(1週齢まで:30～35°,2～3週齢:30°)を行なう。哺乳豚の白痢の対策は早期発見、早期治療の一言につきる。すなわち黄色の軟便から水様性下痢の初期に比較的大量の抗生物質またはサルファ剤を投与するとともに母豚の飼料を2～3割減ずる。薬剤はテラマイシン、コリマイシン、クロマイ系またはサルファ剤で抗生剤の場合は50～100mg/kg、サルファ剤では100～200mg/kg、1日2回、2～3日投与する。

哺乳豚の下痢発生状況



哺乳豚の下痢発生日齢とガンマグロブリンおよび赤血球数との関係

伝染性萎縮性鼻炎 (AR)

豚萎縮性鼻炎は豚の伝染性の慢性呼吸器病の一つである。症状としては最初くしゃみと鼻づまりが見られ、場合によってはさらに鼻漏、鼻血、眼の下の三日月状の部位の黒ずんだ汚れ(アイパッチ)鼻曲がりなどが見られるようになる。

診断の決め手となるのは剖検の際、鼻部の断面において鼻甲介に萎縮性的変化が見られることである。この萎縮が鼻腔の一側にだけおこっている場合は鼻端は横に曲がり、いわゆる鼻曲がりとなる。

病原体についてはいろいろいわれてきたが、近頃Alcaligenes(Bordetella) bronchi Septicusという細菌の感染によって起こるとの説が有力になってきた。一般に子豚とくに哺乳中のもはこの病気にかかりやすいが、著明な症状では2～3ヵ月齢以上の豚に多く現われる。一度感染がおこるとこの病気は豚群間に拡がり、豚は死亡することはほとんどないが成長が阻害され、飼料効率が低下して養豚経営上大きな被害を与える。

本病に対しては現在有効なワクチンも根本的な治療薬もない。対策としては一般伝染病の場合のそれとほぼ同じであるが、まず本病の発生のない清浄豚群からだけ子豚を導入し、つぎにもし本病が発生したら発病豚は厳重に隔離する。この際サルファ剤および抗生物質テラマイシンなどを投与すれば症状は相当軽減することがある。ただし繁殖豚は治療を行わずすみやかに肉豚として出荷する。



鼻のまがった状態